［第８回日本言語文化学研究会発表要旨］

安部公房の文学における故郷と都市の関係

エドウィナ・ギブス
（1994.6.4発表）

安部公房の初期の作品では、故郷喪失が重要なテーマとなっている。ここで言う故郷とは農村と日本という国家との二つの意味で用いられている。また、昭和40年以降、安部の作品の多くは　都市、疎外と人々のアイデンティティ喪失の問題といったテーマで貫かれている。安部が故郷と都市の両方のテーマに引かれていることが単なる偶然ではなく、彼の見ている故郷と都市の間に何らかの深い関係があるのではないかと思われる。

そこで、発表では、安部公房の文学における故郷と都市の関係を考察し、彼の都市観を把握することを目的とした。扱った作品は故郷喪失文学については、『終りし道の標べに』（昭23）、『けものたちは故郷をめざす』（昭32）と、都市については、『燃えつきた地図』（昭42）である。

まず、故郷喪失文学については、安部公房の文学において、故郷が不在であること、そして故郷が定着という概念と同一視されていることに注目した。

次に、都会が主題になっている『燃えつきた地図』を取り上げ、その中に、外の荒野めいた都会と、都会人の帰るべき団地の部屋という二つの対立的な空間があることを指摘した。都会は移動の空間、そして団地の部屋は定着の空間として描かれている。また、その作品の登場人物が団地の部屋を断念することは、定着、共同体と、それから連想される故郷の概念の否定であると解釈した。

安部公房の都市観が故郷的なものの否定によって形成されていると考えた。それが故に、安部公房は、『燃えつきた地図』の中で、彼の故郷喪失文学に表れている故郷のイデーと正反対の空間を描こうとしているのではないかという結論にいたった。

お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士２年